

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00731

研究課題名（和文）中国人日本語学習者の言語習得過程の実証的研究と教育的資源の提供

研究課題名（英文）Empirical research on the language acquisition process of Chinese learners of Japanese and educational resources

研究代表者

布施 悠子（Fuse, Yuko）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・プロジェクト非常勤研究員

研究者番号：70782598

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の最終目的は、中国人学習者の日本語の習得順序および習得上の困難点を把握することで、実態に即した教材や教授法の開発を行うことである。そこで、中国国内の大学の日本語学科に入学した大学生17名を対象に、4年間にわたるインタビュー調査と作文調査を実施して日本語の習得過程を記録し、中国人日本語学習者の習得の過程で現れる変容の実態や誤用、学習の困難点を実証的に明らかにした。終了時の研究成果として、2件の国際シンポジウム、3件の学術論文、10件の口頭発表を挙げたほか、本科の研究成果を収録した論文集、および個人情報保護等の観点から精査を行った学習者縦断コーパスの公開を2022年度中に予定している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の言語研究は、文字化した言語データを大量かつ体系的に収集し、コンピュータで検索・分析できるようにしたコーパスがその中心となっている。とくに近年注目されているのが、学習者の言語使用を反映した学習者コーパスである。日本語教育ではI-JASという多言語母語の学習者コーパスが代表的だが、言語習得の観点からすると、横断コーパスであるI-JASは学習者の経年的変化を追跡できず、その点で物足りなさが残る。本研究が開発したB-JASは縦断コーパスであり、地理的な広がりを示すI-JASと、経年的変化を示すB-JASを組み合わせることで、学習者の日本語習得過程の総合的な解明に力を発揮することが期待される。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to understand the learning sequence and difficulties in learning Japanese among Chinese learners of Japanese, in order to develop teaching materials and teaching methods that match their language acquisition facts. To this end, we conducted a four-year interview and writing survey of 17 university students enrolled in Japanese language departments at universities in China to record the process of Japanese language acquisition, and empirically clarified the actual conditions of development, misuse, and learning difficulties that emerge in the process of their acquisition.

The research results include two international symposiums, three academic papers, and ten oral presentations, as well as the publication of a collection of papers containing the research results of this project and a longitudinal corpus of learners, both of which are scheduled to be released in FY2022 after careful examination from the perspective of personal information protection.

研究分野：日本語教育

キーワード：第二言語習得 日本語教育 中国語母語話者 中国人日本語学習者 学習者コーパス 縦断コーパス I-JAS B-JAS

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者が所属する国立国語研究所では、多言語を母語とする学習者の横断コーパス I-JAS を開発しており、目標言語である日本語にたいする母語の影響を明らかにするのに有用なデータとなっている。一方、I-JAS は横断コーパスであるために、学習者の習得過程を見るのに十分ではないという弱点があった。その弱点を補うために、研究代表者は B-JAS という縦断コーパスの開発に着手した。B-JAS は、中国の大学の日本語学科に日本語未習の状況で入学した学生が卒業するまでの 4 年を追跡する経年的なデータであり、I-JAS という横系と B-JAS という縦系を組み合わせることで、日本語学習者の習得実態を総合的に分析できると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の最終的な目的は、中国人日本語学習者の 4 年間の習得過程を追跡することで、日本語の習得順序や習得上の困難点を把握し、そうした困難点の解決に結びつく教材や教授法の開発を行うことである。

そのため、まず学習者一人ひとりの習得過程の分析が重要であり、中国国内の大学の日本語学科に入学した大学生の言語習得過程を 4 年にわたって丹念に記録し、そのデータをもとに学習者縦断コーパスを作成する。また、収集したデータについては適切なアノテーションを施し、国内外の研究者が利用可能な形でのコーパス公開を目指す。

次に、作成したコーパスで研究代表者および分担者がデータの分析を行い、中国人日本語学習者の言語使用の変容を縦断的かつ多面的に分析し、その過程で現れる変容の実態や誤用、学習の困難点などを実証的に明らかにする。その分析結果を用い、最終的な目的である教育的資源の提供を行い、国内外における長期的な視野に立った日本語教育分野への提言に結びつけることを目指している。

## 3. 研究の方法

中国国内の大学の日本語学科で学ぶ 2015 年度入学者 17 名（当初は 18 名であったが、1 名は退学）の学習者を対象に、インタビュー調査、作文調査を行う。

インタビュー調査は、調査項目やデータの収集方法・データ分析に関して、本研究に先立って順次公開が行われている I-JAS とのクロスマッチを目指し、I-JAS の手順に倣いつつ縦断データを収集する。調査は半年ごとに調査員が当該大学に出張し、4 年間で計 8 回調査を行い、録音したインタビュー調査のデータを文字化し、分析を行う。

一方、作文調査は、パソコンを用いて Web 上でデータ収集を行う。学習者には 4 年間で計 11 回作文を執筆してもらい、日本語ライティング能力の経年的発達過程を分析する。

## 4. 研究成果

2 件の国際シンポジウム、3 件の学術論文が研究成果として挙げられる。

### [ 国際シンポジウム ]

- ・国際シンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる 横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴」2018 年 4 月 30 日@国立国語研究所 講堂（発表者：迫田久美子、野山広、張林、費曉東、石黒圭、布施悠子）
- ・国際シンポジウム「北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) の構築と応用研究」2019 年 10 月 20 日 (日)@北京師範大学外国語文学学院（発表者：石黒圭、林洪、布施悠子、張林、費曉東、野山広、朱桂榮、曹大峰）

二つの国際シンポジウムについては、話し言葉の学習者縦断コーパスという日本語教育では類例がほとんどないデータをどのように研究や教育に活用すべきかということを国際的に示したことで、これまで作文データや横断データが中心であった学習者コーパス研究に大きなインパクトをもたらし、同時に今後本研究のデータを公開し、経年的な学習者の習得過程の研究を可能にする道筋を付けることができた。

### [ 学術論文 ]

- ・布施悠子・鈴木靖代 (2021)「対話場面における中国人日本語学習者の「と思う」の習得過程の一考察 『北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)のデータから』『国立国語研究所論集』20、pp.95-113
- ・鈴木靖代・布施悠子 (2022)「対話場面における副詞「ただ」使用上の制約の分析 母語話者と学習者のコーパスデータを比較して」『国立国語研究所論集』22、pp.55-70

- ・石黒圭(2022)「日本語学習者のフィラーの習得と評価 中国語を母語とする日本語学習者 3名を対象にしたケーススタディ」窪園晴夫・朝日祥之編著『言語コミュニケーションの多様性』くろしお出版、pp.123-143

学術論文については、話し言葉の学習者縦断コーパスの分析をどのように行うか、その特徴が顕著に表れている表現を中心に成果発表を行った。

布施・鈴木(2021)では、日本語学習者に共通する困難点と見なされてきた文末表現「と思う」を例に、その発達過程に見られる習得順序を形態面・用法面から明らかにしたものであり、縦断研究の一つのモデルケースを提示することができた。

鈴木・布施(2022)では、母語である中国語の影響から不自然な使用となりがちな中国人日本語学習者の副詞「ただ」の使用を母語話者の比較の中で取り上げ、その用法の偏りと教育上の改善点について示すことができた。

石黒圭(2022)では、母語話者の耳に障りがちな中国人日本語学習者のフィラーの習得過程を記述したものであり、中国語のフィラーから日本語のフィラーに音声的な特徴が変化し、「あの一」「えーと」を経て「その一」「なんか」「まあ」という高次のフィラーの使用に至る特徴を示しており、自然な話し方教育への示唆を与えるものとなっている。

こうした観点からの研究は、先行研究のなかでも行われてきてはいるが、同一の学習者の言語発達程を追いかけて調査したものはなく、習得順序を正確に追跡したこれまでにない研究として高い価値を有する研究であると思われる。

その他、研究期間中 10 件の口頭発表を行っており、そうした口頭発表や共同研究者の研究などもベースにしながら、本科研の研究成果を収録した論文集(15 論文を収録)の刊行を予定している。現在、北京師範大学出版社に完成原稿の入稿を終えており、2022 年度じゅうの刊行を予定している。そこでは、文末表現「と思う」、副詞「ただ」、「あの一」「えーと」などのフィラー以外の多様な言語表現の分析を行っており、日本語教育に関する総合的な第二言語習得研究としてまとまった内容を構成している。

さらに、データベース自体は、最終チェックは終えているものの、個人情報を含むデータであり、研究倫理上の問題が生じないように、公開予定情報の精査を行っている。こちらも、やはり 2022 年度じゅうに作業を終え、学習者縦断コーパスとして国立国語研究所の Web ページから公開し、日本語教育関連の第二言語習得研究者に広く活用してもらうことを予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 鈴木靖代・布施悠子	4. 巻 22
2. 論文標題 対話場面における副詞「ただ」使用上の制約の分析：母語話者と学習者のコーパスデータを比較して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集	6. 最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00003513	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 布施悠子・鈴木靖代	4. 巻 20
2. 論文標題 対話場面における中国人日本語学習者の「と思う」の習得過程の一考察 『北京日本語学習者縦断コーパス(B-JAS)』のデータから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集	6. 最初と最後の頁 95-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00003095	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 石黒圭
2. 発表標題 日本語学習者のフィラーが母語話者に与える印象
3. 学会等名 NINJALシンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石黒圭
2. 発表標題 日本語学習者の作文を分析する
3. 学会等名 第37回NINJALチュートリアル（韓国日語教育学会）講演（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 布施悠子
2. 発表標題 対話場面における中国人日本語学習者の『と思う』の習得過程 『と思う』につく終助詞と接続助詞の変化に着目して
3. 学会等名 2019年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木靖代
2. 発表標題 中国語話者の限定を表す 場面における限定副詞「ただ」の 過剰使用に関する縦断的分析 とりたて詞「だけ」「しか」の 使用傾向との比較から
3. 学会等名 中国語話者のための日本語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石黒圭
2. 発表標題 話し言葉に見る学習者の成長 フィラーを中心に
3. 学会等名 北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) の構築と応用研究 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野山広
2. 発表標題 学習者に対する縦断的ピリーフ調査の結果から見えてきたこと
3. 学会等名 北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) の構築と応用研究 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 布施悠子
2. 発表標題 学習者コーパスから見た「~と思う」の習得過程
3. 学会等名 北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) の構築と応用研究 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新城直樹・布施悠子
2. 発表標題 Adobe Airアプリケーションを併用した著作権教育の提案
3. 学会等名 日本教育工学会第34回全国大会 (宮城・東北大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 迫田久美子
2. 発表標題 中国語母語の日本語学習者の発話に見る語用論的転移
3. 学会等名 日本語教育は学習者コーパスで変わる 横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野山広
2. 発表標題 B-JAS の特徴
3. 学会等名 日本語教育は学習者コーパスで変わる 横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石黒圭・布施悠子
2. 発表標題 中国人日本語学習者のフィラー習得過程の実態
3. 学会等名 日本語教育は学習者コースで変わる 横断コース・縦断コースそれぞれの特徴 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中島秀之、木部暢子、高山善行、小磯花絵、朝日祥之、野田尚史、石黒圭、藤野博、プラシャント・パル デシ、長崎郁、窪園晴夫	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 言語コミュニケーションの多様性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	石黒 圭  (Ishiguro Kei)  (40313449)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日 本語教育研究領域・教授   (62618)	
研究 分担者	野山 広  (Noyama Hiroshi)  (40392542)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日 本語教育研究領域・准教授   (62618)	
研究 分担者	迫田 久美子  (Sakoda Kumiko)  (80284131)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日 本語教育研究領域・名誉教授   (62618)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 北京日本語学習者縦断コース (B-JAS) の構築と応用研究	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 日本語教育は学習者コースで変わる 横断コース・縦断コースそれぞれの特徴	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
中国	北京外国語大学北京日本学研究中心 センター	北京師範大学外国語文学学院	